

綾屋さんと熊谷さんのハコ

医学書院看護出版部 白石正明

綾屋さんと熊谷さんに初めて会ったのは、二年前の五月ごろだったと思う。東大の上野千鶴子先生の研究室で、ある企画（これは後日『ニーズ中心の福祉社会へ』という本となった）の打ち合わせをしていたとき、別件でたまたま二人がやってきた。上野先生は「ちよどよよかった。当事者研究をしたいって言ってる人たち」と紹介してくれた。

一人は電動車いすに乗った体格のよい男性で、視線の強さが印象的だった。その横にふわりと立っている介助者のような女性は、車いすの男性に促されると手話で挨拶（たぶん）をしてくれた。男性は「緊張すると声が出ないので……」と説明してくれたように思う。

そのときは名刺交換をしただけだったので、ちよっと変わった二人連れという印象しかなかった。しかし数日後にメールが送られてきて、添付された「研究成果」を読んで驚いた。人が当たり前のように感じている「空腹感」や「温度変化」がうまく感じられないこと、疲れてくるど街中の看板に襲われたり、水面とコンクリートでは音の反響の仕方が違うのでプールサイドをうまく歩けないことなどが「そんなこともあるかもしれないなあ」と思ってしまうような現実感をもって綴ら

しかしそれは、私たちが感受しているものと質的に違うものではない。むしろ地続きである。私もプールサイドをうまく歩けないような気がするし、居酒屋での会話も年とともに苦手になってきた。ただ、感受してしまうその「量」が違ってくる。綾屋さんのように日常生活で苦しむことはないだけなのだ。私たちは自分の鈍感さに感謝しなければならぬ。

この本を読んで、ある人が「この本に書かれていることはわかるような気がするけど、わかると言っちゃいけない気もする」と言っていたが、「地続きであるが、苦しんでいる人とそうでない人の距離は決定的に遠い」といった感覚を、この言葉はよく表していると思っ。

本ができてからは、私たちはさまざまところへ出かけている。いうまでもなく綾屋さんは新しい環境は苦手だし、電動車いすの熊谷さんにとつて長距離の移動は負担が大きい。しかし、「講演する」と本が売れるんですよ」と言っていると、二人とも「営業だからねえ……」とあきらめてくれる（このあたりは、べてるの影響か）。
というわけで、まずは本が出た直後の昨年九月には、札幌で開かれた日本心理学会での書籍販売もかねて、浦河べてるの家を「聖地巡礼」した。このときの訪問記が『精神看護』の一月号に出ているが、べてるの家がいかにもストレスフルな普通の社会であるか、しかし普通の社会とは違ってべてるメンバーからは綾屋さんの姿が見えている」ということがわかる。感動的なべてるの論になって

れていた。
まず興味を引かれたのは、その驚くべき現象を「他人事」のように語る、極めてクールな語り口である。

「当事者研究の元祖である浦河べてるの家は、感情を吐露して専門家の理解を求めたり、逆に専門家への対抗言説として苛烈な言葉を並べるものが多かったそれまでの「当事者語り」の世界に、ユーモアを持ち込んで新しい語りのスタイルを作り上げた。そのキモは、抱えてきた苦しみをみんなの前に投げ出して「他人事のように」笑いながら研究するところにある。おそらくそれは、苦しみの中をひとり堂々巡りしながら行う「自分探し」とは対極にあるだろう。

同じように綾屋さんも、とにかく自分の中に起きていることを熊谷さんに話した。熊谷さんは、腑に落ちないところを率直に聞く。すると綾屋さんは、熊谷さんにわかるように語り直す。そして熊谷さんに伝わったことだけを記述していく。

これは一見、熊谷さんとの問答によって、これまでの語りでは言い当てられなかった、胸の奥底に眠る「本当の綾屋さん」を探し出しているようにみえるが、そうではないと思う。熊谷さんに伝わったことを綾屋さんは、みずから説明する言葉として新しく採用しなおしたので。初めに「本当の綾屋さん」がどこかにあるのではなく、二人の語りによって事後的に「本当の綾屋さん」があらわれてきた、といってもいい。

メールをいただいてしばらくしてから、月に一
いる（ちなみに同号には、本書に真つ先に目を付けてくれたゲイの作家、伏見憲明さんとの、フリーズしながらの対談も掲載されているのでぜひ目を通してみてください）。

その後は下の表にあるように、関西も含めてさまざまなどころに出かけている。そしてついに先週には、綾屋さんは演劇の世界にまで飛び込み女優デビューも果たしてしまっ。

こうしてみてくると、綾屋さんは人とかかわるのが好きなんじゃないかと思う。京都認知症介護研究会で奈良女子大の浜田寿美男先生が、「自分の障害を的確に人に伝えられる綾屋さんの健康な部分に注目したい」とおっしゃっていたが、「言葉」しているうちに綾屋さんの健康な部分がどんどん表に出てきているような気がする。

京都の帰りの新幹線で綾屋さんが「次会でなんでみんな私に話しかけてくれなかったんだろ」と言うのを聞いて驚いた。
「えっ。みんな綾屋さんに気をつかって話しかけなかったんだよ。じゃあ、えにしの会の二次会には《私に話しかけてください》と書いた鉢巻きでも巻いていこうか」と笑い合っ。

最後に、よくされる質問について。 ●綾屋さんと熊谷さんの「関係は？」

生活上のパートナーです（綾屋さんは前のパートナーからのDVによって離婚をしています。綾屋さんが男女二人のお子さんと二両親と暮らす実家のそばに、熊谷さんが住むマンションがあります。高田馬場近辺では、熊谷さんの乗った電動車

度くらいのパースでお二人に会社に来ていただき、今度は三人で「当事者研究」を始めた。会議室にこもって「これはどういうこと？」、「こう書いたらダメ？」と、原稿を前に話し合うのである。会社に来るたびに綾屋さんの声が、大きく、はつきりしてきたのがうれしかった。

作業を始めてすぐにわかったのは、綾屋さんも熊谷さんも実に正確に言葉をとらえる人だということだ。ちよっとした違和感を口にする、「それはこういうことですか？」と答えてくれ、それによって初めて自分の言いたかったことがわかるというようなことがしばしばあった（ちなみに編集者は、どう転んでもいいように多義的な言葉つかいをする傾向があります。「反省……」）。

正確に言葉を扱いつつも、笑いのツボが近いので毎回の作業は楽しかった。それでも二人には明らかにこは譲れないという一線があった。あるとき熊谷さんが障害者運動バッシングについて語っているとき、本当に怖い目をしていての思い出す。山口から一人で東京に出て来て、とにかくこまで生きてきた苦労は並大抵でなかったたなるポイントがありますよね」「熊谷さん、ムキになるポイントがありますよ」と言ったら、またふつといつもの笑顔に戻ったが。

こんなことを一年以上続けて、『発達障害当事者研究』ができた。

この本で表現されている綾屋さんの苦しみは「過剰」の苦しみといつてもいいと思う。外界はもちろん、身体内部さらにはさまざまモノからもあらゆる可能性を受け取ってしまうのだから。

いすに、綾屋さんとお子さんがハコ乗りして疾走している姿が見られるでしょう。

●熊谷さんの「専門は？」

小児科医として週に三回ほど千葉県のスマイルこどもクリニックに勤務しています。東大大学院では血管の波動について研究していますが、高額な機械がないと計測できないらしく、どこかの研究室でその機械を買うのを待つて休学中だそうです（このあたり何度も聞いたけれどむずかしくてわかりません。直接お聞きになってください）。

●今後の予定は？

綾屋さんは理論社の「よりみちパン！セ」シリーズに、離婚とつながりをテーマに執筆中です。夏ごろには出るかも。

熊谷さんは医学書院で、脳性まひとそのリハビリ体験をもとにした『リハビリの夜』という本を執筆中です。これも夏には出したいですねえ。

書籍発行後の「営業」活動

08年9月	北海道／日本心理学会、浦河べてるの家	精神看護 09年1月号
10月	伏見憲明氏対談	精神看護 09年1月号
10月	ジェンダー・コロキアム	書評セッション (上野千鶴子氏ら)
11月	河本英夫氏対談	看護学雑誌 09年3月号
11月	朝日新聞取材	朝日新聞 09.2.10/09.2.21
11月	共同通信取材	08年12月から全国掲載
09年2月	ピアサポ祭り (ダルク女性ハウス上岡陽江氏ら)	朝日新聞(大阪) 09.03.10
3月	大阪／朝日・大学パートナーズシンポジウム	
3月	京都／京都認知症介護研究会発表 (藤田清一氏、浜田寿美男氏ら)	
4月	演劇：枝わかれの青い庭で (横浜美術館)	ミスノオト・シアターカンパニー